

第9章

谷口の苦悩

青葉学院との事実上の日本一を決める試合に勝利した墨谷二中。卒業を間近に控えたキャプテンの谷口にはもうひとつの大きな仕事があった。それは新キャプテンを誰にするかであった。

9・1 野球部の部室

丸井「さっ、キャプテン。袖を通してください。」
谷口「もう大丈夫だよ、丸井。着がえを手伝ってくれなくても…」
丸井「いいスから、いいスから。」
谷口「もうすぐ、包帯が取れるんだ。」
丸井「よかったでスね。」

青葉戦で右手人差し指を骨折した谷口であったが、その傷もあとわずかで完治する予定であった。

部室から出ると次期キャプテンについての取材で待ち受けていた新聞部につかまってしまった。

新聞部「谷口さん、新聞部ですが次期キャプテンは決まりましたか？」
谷口「いや、まだ…」
新聞部「まだですか、他の部ではもうとっくに決まっていますけど…」
谷口「もう少し待ってくださいか。」
新聞部「あのうわさではイガラシ君が最有力候補だと言われているんですけど…」
丸井「しつこいぞ、おまえら。わが野球部は他の部とは違うんだぞ。なにしろ日本一の栄光を引き継ぐんだからな。キャプテンとしては慎重にならなければならない。」
新聞部「あゝあ…」

丸井が新聞部にわって入って、谷口はほっと胸をなで下ろしグラウンドに向かって歩き続けた。

丸井「キャプテン、おれもやっぱり次期キャプテンはイガラシがいいと思うんでスけどね。」
谷口「どうしてだ？」
丸井「あいつ、一番野球知っていますからね。キャプテンになるからにはよく野球を知ってなければダメですからね。」
谷口「みんなどう思っているんだ？」
丸井「みんなも同じ意見じゃないスカね。」

練習が終わっての帰り道、谷口はまだキャプテンをどうしようか悩んでいた。学年が下のイガラシをキャプテンに決めてしまっっていいものか…

9・2 病院の待合室

谷口の指に巻かれた包帯がようやく取れる日がやってきた。

看護婦「谷口さん。谷口さん。」
谷口「はっ、はい。」

鈴木「下級生のキャプテンなんて前例がありませんからねえ。」
 須藤「前例は抜きだよ、イガラシが一年生の最初からレギュラーになったのだから、前例にはなかったことだからねえ。」

鈴木「おれは高木をおすな。」

南「高木なら西田の方が良いよ。」

須藤「島田だつてやれないことはないぜ。」

中村「こんなところですけどねえ。キャプテン。」

谷口「うむ。」

松下「最終的にはキャプテンの決めることです。我々はキャプテンにしたがいますよ。」

中村「で、キャプテンは誰を？」

谷口「もう少し、考えさせてくれないか。」

9・4 谷口の家で

谷口「ふっつ。」

父「ていへんだなあ、キャプテンを選ぶのも……。」

谷口「ああ。」

母「でも、もう候補はいるんだろ。」

谷口「候補だつたら、みんなそうだよ。」

父「そんなことはあるめえ、タカオ。みんなをひっぱっていくのは、誰でもできるつてもんじゃねえぞ。」

母「そうだよ。」

谷口「でも、おれがやれたんだから。」

父「おめえはよくやったよ、父ちゃんなんか腕が良くつてもよあ、大工の棟梁とくりようとしてみんなをひっぱっていくのは苦手にがてだしな。」

谷口「腕が良くつても……。」

父「そうよ、いくら技術が良くつたつて人の上に立つのは別よ。」

谷口「いくら技術が良くつてもか……。」

その時、玄関のドアが開いた。

丸井「こんばんは。」

谷口「やあ、丸井。」

丸井「キャプテン、もう神社で練習しないんすか。」

谷口「えっ……。」

丸井「なぜですか。」

谷口「……。」

丸井「なぜですかあ！ 卒業しちゃうから、もう関係ないつていうんすか。おれはどんな時でも一生懸命かけて努力する、キャプテンを尊敬していたんですよ。それなのに、おれはキャプテンをみそこないましたよ。」

谷口「丸井……。」

父「丸井さんよ、タカオは練習したくても、もうできねえんだよ。」

丸井「えっ……。」

母「と、父ちゃん。」

父「タカオの指はな、使い物になんねえのよ。」

丸井「えっ、キャ、キャプテン。」

谷口「ああ……。」

丸井「そうだつたんすか、そ、それを知らねえでおれは……。」

谷口「丸井、おれはもうだめなんだ。」

丸井「キャ、キャプテン。」

谷口は言い終わると、「こらえきれず背中を丸井に向けた。

丸井「なんでえ、なんでえ、キャプテンらしくもない、右手がダメなら、左手があるじゃないすか。おれだつて、何度野球をやめようと思つたか知れないですよ。でも一生懸命努力すればやれるんだつて、教えてくれたのはキャプテンじゃないすか、そ、そのキャプテンが弱音なんかはいちまつて……。」

谷口「ま、丸井。」

振り返った谷口の目には涙があふれていた。

丸井「すいません。」

谷口「丸井。神社に行こう。」

丸井「ええっ。」

谷口「一緒に、練習をつきあってくれないか。」

丸井「ええっ、キャ、キャプテン。や、やりましょう。キャプテン。」

二人は野球の道具を持って御岳神社に向かった。

神社に着いた二人はさっそくキャッチボールを始めた。

谷口「いくぞっ、丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「それっ。」

けがが治ったにもかかわらず人差し指が使えない谷口の投げたボールは、山なりのボールとなり丸井の手前で落ちた。丸井はそのボールを見て谷口のけがの深刻さを知り、思わず涙がこぼれ落ちた。

谷口「泣くな！ 丸井。野球部を頼むぞ！ 次期キャプテンとしてな。」

丸井「え、ええっ……？」

谷口「おれに、やる気を起こさせてくれたその気持ちで、みんなを引っ張って行ってくれ。」

丸井「キャ、キャプテン、おれなんかとても……。」

イガラシ「お願いしますよ、丸井さん。」

谷口「イガラシ……。」

イガラシ「キャプテンの家に行ったらこっちだと……。」

丸井「イガラシ、どうしてキャプテンの所に行っただ。」

イガラシ「次期キャプテンは丸井さんが良いんじゃないかと、一言、言いに。」

丸井「て、てめえ、すぎたまねをしやがって……。」

谷口「イガラシ、丸井を頼むぞ。」

イガラシ「まっ、しかたないですね。」

丸井「えっ、しかたないたあ、なんだ、しかたないたあ……。」

谷口「丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「野球部を頼むぞ。」

イガラシ「丸井さん、キャプテンお願いします。」

丸井「は、はい。」

こうして次期キャプテンは丸井に決まった。